学 位 論 文 要 旨

学位論文題目　　「阿Ｑ正伝」作品研究

申請者氏名　　冉　　秀

本研究は、「阿Ｑ正伝」の作品研究である。「阿Ｑ正伝」作品研究の前段階として、まず、魯迅の書いた「賢人、馬鹿、奴隷」(『野草』)におけるそれぞれの登場人物の性格を分析してみた。それから「賢人、馬鹿、奴隷」の作品的意義に照らし合わせて、「阿Ｑ正伝」を分析し、そこに描かれる内容の最終的な意義と、目的を探った。その結果、従来の研究水準を超えて解明できたところがあると考える。その際、本研究の内容構成は以下のようである。

第一章「阿Ｑ正伝」の先行研究の系譜の整理。中国と日本における先行研究をそれぞれいくつかの段階に分けて紹介する。

第二章：「阿Ｑ」という名前から語り手「私」の気持ちを探究する。「阿Ｑ」の名前の中に、古い中国精神を見てそれを否定する志向と、新しい中国社会への変革を期待する志向の二面を見て取ることができる。

第三章：阿Ｑにとっての「主人」―「鉄の部屋」を打ち砕く可能性。阿Ｑが活動している舞台未荘は、「鉄の部屋」のようであると思う。封建社会に培われた阿Ｑが、その考えや行動規範すべてが自分の属している封建的因習まるで「鉄の部屋」の中に閉じ込められいた。悲劇なのは、阿Ｑ自身がその「鉄の部屋」の中に、安住し安楽しているのである。しかし「奴隷」としての阿Ｑは、最後にこの「鉄の部屋」にも生きられなくなり、処刑される。阿Ｑが最後に「助けてくれ」を叫び出そうとすることは、阿Ｑの思想上での覚醒と言えないが、その身体上から、「鉄の部屋」の恐ろしさに抵抗する声であり、同時に「鉄の部屋」が崩れる方向性を示唆している。

第四章：阿Ｑにとっての「賢人」―精神勝利法の崩壊軌跡を考察する。精神勝利法は阿Ｑにとっての「賢人」である。劣勢状態や失敗に遭ったとき、阿Ｑはいつも精神勝利法と自尊心（プライド）によって、自分をごまかし、「奴隷」的身分でいられる。本章は、精神勝利法が阿Ｑの中で崩壊していく軌跡を追跡し、作品結末における阿Ｑの叫び出そうとする行為が精神勝利法からの告別であることを述べる。

第五章：「阿Ｑ」の恋愛悲劇について。阿Ｑは、封建的婚姻制度を遵守する「奴隷」でありながらも、自分の意志に従って「馬鹿」的求愛行動をし、封建的婚姻制度の「奴隷」たちに追い払われる。その求愛活動は現実には失敗に終わるが、客観的には、家父長制による封建的婚姻制度の崩壊につながる行動である。

第六章：「阿Ｑ正伝」における女性像―「奴隷」と「奴隷」との対決から見る女性の悲運―。尼さんと呉嫣は、「阿Ｑ正伝」における女性像の「人生」である。彼女らは封建的貞操観と節烈観の「奴隷」であ理ながらも、自分なりの抵抗を見せていた。しかし、悲劇なのは彼らの抵抗はあくまでも「奴隷」対「奴隷」の抵抗であり、彼女らが順重している「主人」の封建制度や封建同国規範には少しも抵抗しなかったことであると思われる。彼女らの最終的な運命は、封建的貞操観と節烈観を遵守する彼女たちの人生に対する教訓が含まれる。

第七章：「偽毛唐」から見る中国近代知識人。「偽毛唐」は、「知識人として描かれた。彼のシリーズの中国を変革する夢が崩壊する過程を追求することによって、当時の絶望的な中国現実に対する知識人の生き方を分析してみた。

第八章：阿Ｑの革命から見る中国変革。革命のとき、「賢人」、「馬鹿」、「奴隷」の性格が一斉に阿Ｑの身に現れ、最後に一斉に阿Ｑと一緒に破滅した過程を探って分析した。そし

て、それが如何に最後の「大団円」という題名と相応するかを明らかにした。そうして「阿Q正伝」の全体的作品意義も明らかになったと思われる。

終章において結論を述べた。「阿Q正伝」は、封建社会の「各種の人生」がどれほど絶望的な社会環境の中で生き、過ごされているかを、如実に描いている。「阿Q正伝」において、それぞれの登場人物はみな、「賢人」、「馬鹿」、「奴隷」という三者によって構築される、すなわち三者の有機的なバランスをもって構築される社会体制の中に生きている。阿Qのような「奴隷」的民衆は、屈辱を受けても、圧迫されても、いつも精神勝利法と自尊心（プライド）によって、「主人」の封建的未荘文化に一切抵抗せずにいられている。彼らは、「鉄の部屋」のような封建的文化に閉じ込められ、啓蒙思想や革命思想に対して未覚醒のままに、彼らの圧迫される「奴隷」的身分を守り、そして未覚醒の状態で自分の「奴隷」的身分から目をそらしている。それは当時の中国における、崩れそうもない絶望的な社会体制である。語り手は、上のような絶望的な中国の状況、中国国民の状況に直面し、その全体像を、その抱える諸問題を、「阿Q正伝」の中で把握し表現しようとしたと思われる。

そして「阿Q正伝」はこの絶望的な社会体制に崩れる方向がないわけではないことを示す。その糸口は阿Qの最後の、「助けてくれ」という叫び声を上げようとする行為にあると思われる。阿Qの「馬鹿」的な、身体上から叫ぼうとする行為がこの絶望的な現実を救える最後の希望であると読み取れる。もし当時の中国の「奴隷」たちが、未覚醒であっても、阿Qのような身体上から「馬鹿」的要求に従い叫び出したなら、この崩れない社会体制が動揺し始めるであろう。そうであれば、中国は絶望的状況に陥ったままではないであろう。「阿Q正伝」は、中国の将来のかすかな黎明を最後に暗示していると思われる。つまり、阿Qの最後の叫ぼうとする行為が、わずかながらにも中国が変革に赴く希望を暗示している。

これが、本研究の結論である。本研究は、1920年代初め、「私」が当時の中国社会に対して考察した諸問題を、とりわけ中国変革における諸問題を、「阿Q正伝」において全体的に表現したものと考える。当時の中国が抱える諸問題を、本研究はさまざまの角度から読み解こうとし、分析を進め、以上のように全体的に論考を総合し押し進めて、上記の結論に達した。

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 101 号	氏　名	冉　秀
論文題目	「阿Ｑ正伝」の作品研究		

（論文審査概要）

本論文は魯迅の代表作「阿Ｑ正伝」の作品の意義を明らかにするものであり、序章、終章のほか、八章の本論から構成されている。その概要は次の通りである。

序章では、本研究の研究目的、研究方法、論文全体の構成を述べるとともに、使用テキストについて説明している。本研究は、「阿Ｑ正伝」の意義を魯迅のエッセー「賢人、馬鹿、奴隷」との関連のなかで取り上げることを述べ、この作品の三人の登場人物について説明している。即ち、「奴隷」は最も絶望的な抑圧の下に置かれているにもかかわらず、「賢人」の口先だけの気休めに一時の慰めを見出してしまい、「奴隷」の悲惨な状況を真に変革しようとする「馬鹿」の行動に対しては、むしろそれを抑圧するという反動的行動に出る。ここに、当時の中国が、国内に現実変革の主体を見出し得ない絶望的閉塞性が示されていると述べている。

第一章では、「阿Ｑ正伝」の先行研究が検討されている。1.1 では中国における研究史を取り上げ、1.2 では日本の研究史を取り上げて、作者魯迅の思想と創作意図、主人公阿Ｑの人物像、女性達や知識人の描かれ方、中国革命のあり方等の様々な側面における先行研究の成果が明らかにされている。そして、本研究はそれらの研究成果を踏まえつつ、それらを「賢人、馬鹿、奴隷」と関連させるという独自な観点から総合的に見直すことで「阿Ｑ正伝」の全体としての作品の構造と意味を明らかにすると述べている。

第二章では、「阿Ｑ」の名前に示された語り手の志向性を問題にしている。具体的には、「阿Ｑ」という名前のなかに封建的で未覚醒な性向が見てとれることから、語り手の「阿Ｑ」に対する絶望的無力感と将来の変革への期待感の両面が窺われると指摘する。

第三章では、阿Ｑの生きた当時の中国の現実を、彼の住む村（未荘）のありようを通じて分析している。具体的には、封建社会の価値観の中で生きてきた阿Ｑは、考え方や行動の細部に至るまで封建的因習に支配されており、しかもそれ以外の考え方があることを知らず、無意識のままその中に安住し、満足している。これが、阿Ｑの「奴隷」的なありようであると述べている。

第四章では、阿Ｑが当時の中国の現実からどのように目をそらしつづけたか、そのメカニズムを問題にする。即ち、彼は劣勢状態や抑圧下に置かれたとき、「精神的勝利法」によって一時の気休めの中に逃避し、慰めを得て自分のプライドを守る。それはまさに「賢人、馬鹿、奴隷」において、「奴隷」が「賢人」の気休めによって「奴隷」的位置に釘付けにされ、変革へのエネルギーを抜き取られるありようであると指摘している。

第五章では、阿Ｑの恋愛行動の意義を問題にする。平素は封建的婚姻制度を順守する「奴隷」である阿Ｑが、自分の内なる欲求に突き動かされて女性に直接求愛する。それは、当時の中国の封建的現実に対立する盲目的行動である。求愛そのものは失敗するが、それにもかかわらず、それは中国の現実への積極的な働きかけ（「賢人、馬鹿、奴隷」における「馬鹿」的な行動）であり、やがて中国変革へ向かう可能性の萌芽として、積極的な価値があったと指摘する。

第六章では、「阿Ｑ正伝」に描かれる女性像について検討している。彼女たちはいずれも封建的婚姻制度に縛られておりながら、封建的道徳規範に対して全く抵抗しない。それはやはり彼女たちが「奴隷」的存在であった事を示しているという。

第七章では、「阿Ｑ正伝」に描かれた中国近代知識人（「偽毛唐」）の思想と行動について検討している。革命当初は中国変革のために果敢な行動に出ようとした知識人も、支配者層のみならず民衆からも激しい反抗と嘲笑を受けることで、やがて自らの理想を裏切らざるを得なくなる。それは、「賢人、馬鹿、奴隷」における「馬鹿」的行動が、「奴隷」の反抗によって「賢人」的存在へと後退、変質する過程であるといえる。

第八章では、「阿Ｑ正伝」から見た中国革命の展望について検討している。革命に対する阿Ｑの考えと行動の中には、「奴隷」的側面、「賢人」的側面、「馬鹿」的側面が有機的な関連の下に示されている。彼は革命においても自己の利益と保全しか考えておらず（「奴隷」的側面）、銃殺されるまでの過程でも事態に正面から向き合うことはない（「賢人」的側面）。しかし、そういう彼も、銃殺される直前、民衆の目を見て真の恐怖を覚え、「助けて」と叫ぼうとする。彼はここで初めて中国の絶望的現実に直面し、魂の底からの真の声を発そうとした。それは、彼がようやく自己救済への行動に自ら踏み出そうとしたということを意味する（「馬鹿」的側面）。このような作品結末は、「奴隷」が「賢人」の気休めに耳を貸さず、自己の魂を救うために「馬鹿」的行動に踏み出す時、中国に現実変革の可能性が生じることを暗示していると指摘している。

終章では、本論の内容を総括しながら、筆者の今後の課題が、「阿Ｑ正伝」の日本語訳テキストの綿密な比較検討を通して、中国での日本文学の研究と教育における「阿Ｑ正伝」の新たな意義と可能性を探ることにあると述べている。

以上の論文内容から、審査委員会は次のように判断した。

１．創造性

従来の学説を十分に理解したうえで、「阿Ｑ正伝」を「賢人、馬鹿、奴隷」と全面的に突合せ、比較検討することで、「阿Ｑ正伝」研究に新しい知見を付け加えるのに成功しており、この研究分野における学問的意義は明確である。

２．論理性

「阿Ｑ正伝」の分析においては、作品の形式と表現に即して周到に論証が進められており、論理的で一貫性のある研究手続きに基づいて結論が導かれているといえる。

３．厳格性

中国と日本の両方における「阿Ｑ正伝」の膨大な先行研究を精力的に渉猟、整理して、

各々の論の意義を明らかにしたうえ、本研究のなかにそれらに生かしており、その厳密性は高く評価できる。

４．発展性

本研究は「阿Ｑ正伝」と「賢人、馬鹿、奴隷」の対比が論の骨格をなしているが、これは様々な比較文学的研究への可能性を示しており、将来の筆者の研究においてさらに豊かに発展させられ得る研究視角であり、方法であるといえる。

以上により、 審査委員会における審査委員の合議によって全体の評価が「達成できている」との結論に至った。従って、論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果
合・否

審査委員　主　査　（氏 名）村上林造

（氏 名）有元光彦

（氏 名）[illegible]

（氏 名）＿＿＿＿＿＿＿＿ 印

（氏 名）＿＿＿＿＿＿＿＿ 印